

---

# 俺の街のデパートで

とっくり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の街のデパートで

### 【Nコード】

N7604Y

### 【作者名】

とつくり

### 【あらすじ】

いつもど通りの『日常』が続くと思っていたそんな矢先。新装オープンのデパートで子どもから老人まで中にいた人たち全員閉じ込められた！？  
生き残れるのは七人まで！？そして最悪のゲームが始まる。黒幕は？目的は？主人公たちは、生き残ることができるのか……

## ブログ 「新装オープン」

春が来たと思うほど、最近は、暖かくなってきており、街の様子も変わってきた。

入学シーズン到来、といったようで家族ぐるみで休日買い物をする人が増えている。

三月二十六日 土曜日 街の中心的デパートの新装オープンの日。

今日もいつものように、荷物を持たされる父親や駄々をこねる子ども、それでも楽しそうに

会話をしながら買い物をする人。

新装と聞いて買い物に来る人。

いつもど通りの、人でごった返した息苦しい日が始まるはずだった。

高層ビルが立ち並ぶ街。そのビル群の中でひととき高いビルの一室。きれいに整頓され、塵一つない部屋。パソコンをたちあげ、ひとときわ大きいテレビの電源をつける男。

部屋を照らすテレビの画面には、朝の顔と言うべき大柄の男性アナウンサーがデパートの様子について

こと細かく丁寧に説明していた。その画面の後ろには、無数の報道陣の姿も見える。

『こちら本日新装オープンの王議<sup>おうぎ</sup>グループのデパート前です』

『じーさんのように開店前から長蛇の列ができています。』

カメラの映像がデパート前の入り口を映した。走り回っている子どもから、高齢者の人まで  
さまざまな年齢の人が並んでいる。

『さっそくインタビューしてみます。』

『今日は、何を楽しみに？』

『デパートの中にある、クラウン・クラウンっていうお店ですね。雑貨屋なんですけど、近くにお店がなくて……そしたらこのデパートの中にできるって聞いたので。』

笑顔で答える女性。

『そうですか、あとで私も行ってみようと思います。また、お伝えしたいと思います、それではいったんスタジオにお返しします。』

その様子を、見ていた男は、自分以外いないその部屋の中で独り言を零す。  
『こほ』

『やっとここまで成長したな。』

（人を踏み台にしてきてようやくここまでできた）

『とりあえず安心だ……』

この男もまた、いつもど通りの忙しい日が始まると思っていた。

## ブログ 「新装オープン」 (後書き)

はじめまして、とつくりです。この作品を読んでもくださった方々ありがとうございます。

初作品なので、たくさん矛盾があると思いますし、いつまで続くかわかりませんが

温かい目で読んで下さるとうれしいです。

次話は、できる限りはやく投稿しようと思います。

## 第一話 「さあ、行こう」

同日。 王譲高校学生寮。

『……それではいったんスタジオにお返しします。』

「ねえ、せっかくの休日だよ？」

広いとは、言えない二人用の部屋に声が残る。

「……」

「ねえ、無視ですか？この二人部屋で無視ですか？」

あからさまに、文句を言う一人の少年。

声は、男子にしては、高く体も小柄。しかし筋肉は、細いながらにかたくしっかりしている。

顔は、童顔で背の低さも重なり中学生に間違えられることもあるらしい。

だがしかし、陸上部でそこそ早い奴だ。……あんまり知らないが。とりあえず青年でなく少年という扱いだ。

「……」

「……紅美ちゃん。」

少年の一言に過剰なほど反応し固まる俺。

……なぜ知っているんだ？

ま、まて落ちて着け俺、如月紅美<sup>きんみ</sup>さんは、ただの友達じゃないか！！  
たしかに、ちょっと細いし、雪のように白い肌もいい。それと対照的に黒くつやのある長い髪。さらに、目がぱっちりしてて背もちっ

ちやいー（俺に比べて）だが笑顔がお姫様のように可愛い……  
ちよつとだけ、手に触れてみたいとか思うし、もし彼女だったらな  
あとか……

しかし、そんなことは、万が一にもないぞ俺！動揺するな俺！

如月さんが彼女だったらかあ……

「<sup>りょう</sup>淳くん……そういうことは、心にしまっておこうね？」

「<sup>ゆう</sup>悠……おまえエスパーだったのか！？」

悠と呼ばれた少年、もとい神崎悠は、<sup>かんざきゆう</sup>すらすらと先ほどの状況を簡潔に言ってくれた。

「いやいや、常識的にありえないからね？というか全部ぶつぶつ言  
ってたし、急に叫んだかと思っただけ……まさかとは、思ってたけどそんなに紅美ちゃん  
のこと好きなんだ？」

穴があつたら入りたいとは、こういうことが……  
こうなったら、認めるしかないな……

「ああ、俺は、如月さんのことが好きだ！！」

言ってしまった。だがしかしこれで悠もわかってくれるだろう……

「ふえ！？」

「え？まじで！そうだったんだあゝ」

不意に部屋の入り口から声がかかる。まさか！？



この可愛らしい声と女子にしては、乱暴な口調……  
間違いない、この声は、如月さんだ。  
だが、しかしなぜここに如月さんが？

「淳くん、また口に出てたよ？いくら紅美ちゃんが好きでも、紫苑ちゃんを乱暴扱いは、よくないと思うよ？……あながち間違っていないけど。」

「ヒドッ、私これでも一応か弱い女の子よ！？」

この乱暴なやつは、ふじくらしおん藤倉紫苑。女子の中では、割と背が高く、運動神経も良いほうで  
悠と同じで陸上部に所属している。

「まあ、それで？紅美のこと好きなんだ？」

「そう、それだ！なぜ、如月さんがここに居るんだ？」  
素朴な疑問である。

「あつ、僕が呼んだ。」

「あつあの！！今日は、なんで私たちを？」

……顔が真っ赤になってる、可愛いなあ  
なんか、なでたくなってくる。

「淳、セクハラ」

「淳くん、また口に出てますよ？」

もう、無視だこれは、無視するしかない！

「まあ話を戻そうか、二人を呼んだのは、今日オープンする王譲デ

パートにみんな遊びに行こうっていうことで集めたんだよ。」

それであんなに、話しかけてきたのか。

「いいじゃんそれ！行こうよみんなで！」

「紫苑ちゃんが行くなら、私もいきます！」

「じゃあ、決定ということだ。」

「俺の意思はどこへ？」

「紅美ちゃんが一緒なのに？」

……そうか、そうだな！俺のテンションは、限度というものを知らないらしい。

如月さんが来るなら、選択肢は、一つ！

「さあ、お前ら！今は八時だから、九時に出発だ！」

こうして、俺たちは、王譲デパートへ行くことになった。

ちなみに、如月さんが変な悲鳴を上げたのと  
悠と紫苑が、ガッツポーズをしていたのは、秘密である。

……まさか、こんな幸運に俺が恵まれていたなんて！  
悠と紫苑は、おいといて私服姿の如月さんが見れる！

……俺の服は、大丈夫だろうか？荷物は？オツと危ない携帯を忘れるところだった。

財布、携帯、ハンカチ、ティッシュ……

「淳くん……口に出しながら確認することは、いいことですがこの小学生ですかあなたは？」

「大丈夫だ、問題ない今の俺は、いつもと違うんだ！」

そう……なんか、こう、口角が上がったまま下がらない感じた。  
自分で言うのもなんだが、俺は、体つきは、良いほうで身長も176センチと高い。

それで、普段は、『無口なオレ』のはずが今は、『ニヤニヤしている少しアブナイ、オレ』になり下がってしまったている。

「ニヤニヤしているアブナイ人、準備は、もう終わったのですか？」  
悠が、今にも吹き出しそうな声で聞いてくる。

……もう笑うなら笑ってくれよ。

「ぷ、ぷぷ、あはは、もう駄目我慢の限界！」  
大きい声をあげて笑いだす悠。

「淳くん、ほんとに考えてること口に出しすぎですよ。」  
口に出してる自覚がありません。

「とりあえず、今日は、紅美ちゃんも一緒なんですから気をつけてください」

「今、気づいた。なんで敬語になっているんだ悠。」

「アブナイ人には、気を許してはいけないのです……」

「わかった！わかったから、敬語はヤメテ」

「じゃあ紅美ちゃんの前では、頑張ってね！」

不気味に悠が、笑ったのは、気のせいだとも思います。ハイ。

……驚いた。

何に驚いたかつて？

じゃあ考えてみて、友達の学寮に呼ばれる、部屋に入る。

『ああ、俺は、如月さんのことが好きだ！！』

普通に考えてびっくりするよね。

それなのに……その人を含めて買い物に行くなんて。

「紅美、どうしたの。」

「うつん、ちょっと唐沢くんのこと……」

「ああ、淳？ 気になくていいってあんな奴、というか男一人の告白ぐらいでうるたえないですよ。」

「紫苑ちゃん……ぐらいって。」

「とにかく！ 今日、買い物を楽しもうよ！ 淳が変なことをしたら張り倒すから！」

「あはは……ありがとう。」

……よし今日は、思いっきり楽しんでやる！  
唐沢くんには、びっくりしたけれど……ね。

「そうそう、淳に何かおごらせればいいのよ。すぐ買ってくれるわ、あいつなら。」

「紫苑ちゃん……冗談に聞こえないんだけど。」

「え？ 冗談なんか言っていないんだけど……」

九時十分前には、唐沢くんも神崎くんもすでに私たちを待っていました。

……なんか、かっこいいんですけど、唐沢くんの私服。

## 第一話 「さあ、行こう」(後書き)

紫苑 「なんか、私の説明雑じゃない？」

悠 「僕たちは、作者に逆らえませんか。」

とつくり 「雑で、すみません!!」

紫苑 「私の役ふやさないよ。」

とつくり 「考えておきます……」

……というわけで、一話目です。次は、いつになるか分かりません。  
できる限りがんばります！

## 第二話 「俺の家族」

同日 王議町の民家

『クラウン・クラウンっていうお店ですかね……』

傍にあつたりモコンを手に取り、テレビの電源を落とす。

久しぶりの休日。久しぶりに家族で買い物に出かけようかと思う。

……娘も妻も食い入るようにテレビを見ていたことを思い出す。

「お父さん！なんでテレビの電源落とすの！？私見てたんだから！お母さんもなんか言つてよ

一緒に見てたでしょ！」

「そうねえ……急に電源を落とされるとは、思わなかったわ。」

「……それなんだが、久しぶりの休日でな、いまからさっきのデパートに行くことで許してくれないか？」

「お、お父さん！？急にやさしくなつてどうしたの、病気？」

……さすがに、病氣扱いされるとは、思わなかった。

今まで仕事一筋だったから、仕方ないと思うが。

「……………グローブ買ってくれるなら行く。」

息子にねだられること、娘にねだられること、予想はしていたが出費は大変なことになりそうだと思う。

「じゃあ、美幸、直弥準備しておいで。」

「……………うん」

「すぐ、きがえてくるわ。」

「悪いわね、せつかくの休日だったのに……」

「たまには、父親らしいことをしなきゃな……」

妻が過労で自宅で倒れて病院に入院したのは、一年前。  
息子が俺に自分のことを話さなくなったのは、二年前。  
娘が俺をあらかじめ避けはじめていたのは、三年前。  
俺が家族に関心が無く仕事づけになったのは、半年前。

朝早く一人で会社に向かい、会社では能力の無い上司に叱られ、家に帰ると休む場も無い……

それが変わることなく続いていた。

なんで、俺がこんなに苦勞しなければならぬ……

何故お前たちは、そんなに無駄に金を使おうとするんだ！

それは、俺の金だ、俺が頭を下げてまわったり一日中パソコンの画面と戦っていたり、

俺が働いて俺が苦勞して手に入れた金だぞ！

それでも……それでも自分が全部悪いのは、俺が一番わかってる。

妻に家のことをまかせっきりにしていたのも自分。

息子は、強い子だから大丈夫だと思ったのも自分。

娘は、変わらず昔のままだろうと思ったのも自分。

それを認めず逃げ続け事実から逃避したのも自分。



俺も家族も、変わってしまった。

もう昔の思っようには……自分の理想の結婚生活は……などと……

だが、今の俺は違う。

昔の自分の過ちで失ったものは、今の自分を取り戻す。  
そう決めた。

家族をもう失わないために、自分を忘れないように……

「お父さん行くよ！何ぐずぐずしてんのよ。」

「……早く」

「美幸、直弥、そんなこと言わないの。」

「悪い悪い、考え事してた。それじゃあ行こうか。先に車に乗っ  
といて。」

俺は、いいお父さんになるんだ……

デパートに着くまでがとても長かった。

マスコミの宣伝、あの王譲グループの新装デパート、誰もが行くと  
考えられる。

それでも甘く見すぎた。

渋滞のせいで先に進めないのだ。……これでは、車を止められるかをも怪しい。

ちよつと歩くが仕方ない。

普段の自分なら絶対渋り止めないが、特別な日なので有料の駐車場に止めることにした。

「ちよつとお父さん！まだ着かないの！？」

「まだだ、少しぐらい歩け。」

文句を言われてしまった。今日は、もう文句を言われないように気をつけ……

「だから、もう少し近いところに止めろって言ったのよ！」

……今日は、十回以上言われないようにしよう。……あと八回か。

あれから、少しばかり時間がたち現在九時四十五分。

王譲デパートは、十時開店のようで長蛇の列ができていた。

さまざまな年代の人がいるようで、前には学生四人組。後ろには、男一人が並んでいた。

「なあ……」

妻に声をかける。

「なんですか？」

「今日どこの店に行ってみたい？」

「どこでも、いいですよ。」

やさしく、落ち着きのある声でゆっくりと話してくれる妻。  
すると突然前の学生四人組に話しかけられた。

「家族で出かけてるんですか？」

髪の長い白い肌の子が話しかけてきた。

「ええ。」

それに、妻がやさしく答える。

目の前の女の子は、歳とった中年がいうことでは無いが美少女というカテゴリーに入ると思う。

俺の妻は、歳は、とっているものの若さには無い上品さを持っている。

「うらやましいですね。……あなたの旦那さんのような人と結婚したいです私。」

うれしいこと言ってくれるじゃないですか。

「ええ！紅美あんた年上好きなの！？」

「淳くんどうするの？」

「俺は、そんな如月さんでも大丈夫だ。」

同級生であろう子たちが騒ぎだす。

そんなに駄目かな俺……

さらに娘が追い打ちをかけてくる。

「ええ！お父さんなんかやめたほうがいいって！後悔するよー！」

「美幸、私はどうすればいいの？」  
妻が、先ほどとは違う声色で話す。

「……ええっと、ドンマイ！」

「母親に、向かってドンマイは、無いだろ。」  
ここは、何としてでもいい父親でいなければ！

「お父さんに言っているんじゃないの！お母さんに言ってるの！」  
怒らせてしまった。……あと七回。

「私は、後悔してないわ。」  
妻が私のことをこんなに思ってくれていたなんて！嬉しい！嬉しいよ！

「……アホみたい。」

「ん？なんか言った直弥？」

「……べつに。」

息子は、なかなか昔のようには、ならないな……

『只今より、王譲デパート。開店です！』

「「「いらつしゃいませ」「」」

アナウンスと共に大きな声で挨拶する店員さん。  
後ろから見ただけでも中の広さと清潔さが分かる。  
ほんとに大きい……人も多いしはぐれないといいけどな。

「それでは、また。」

そう言つて目の前にいた学生四人組は、歩いて行つた。

先に進んだ四人を見て何か思うことがあつたのだが、何か分からない。

とりあえず……

「初めにどこへ行くんだ？」

場所を確認しておかなければ。

## 第二話 「俺の家族」(後書き)

淳 「今回俺一言しか喋って無い!」

悠 「仕方ないよ。家族模様を理解しなきゃ今後読者が困るから。」

とつくり 「そういうこと言わないでください……」

悠 「今後の予定は、大丈夫なんですよね?」

とつくり 「……………」

……というわけで第二話です。だらだら頑張ります。  
次は、すこし遅れると思います。すみません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7604y/>

---

俺の街のデパートで

2011年11月24日21時48分発行